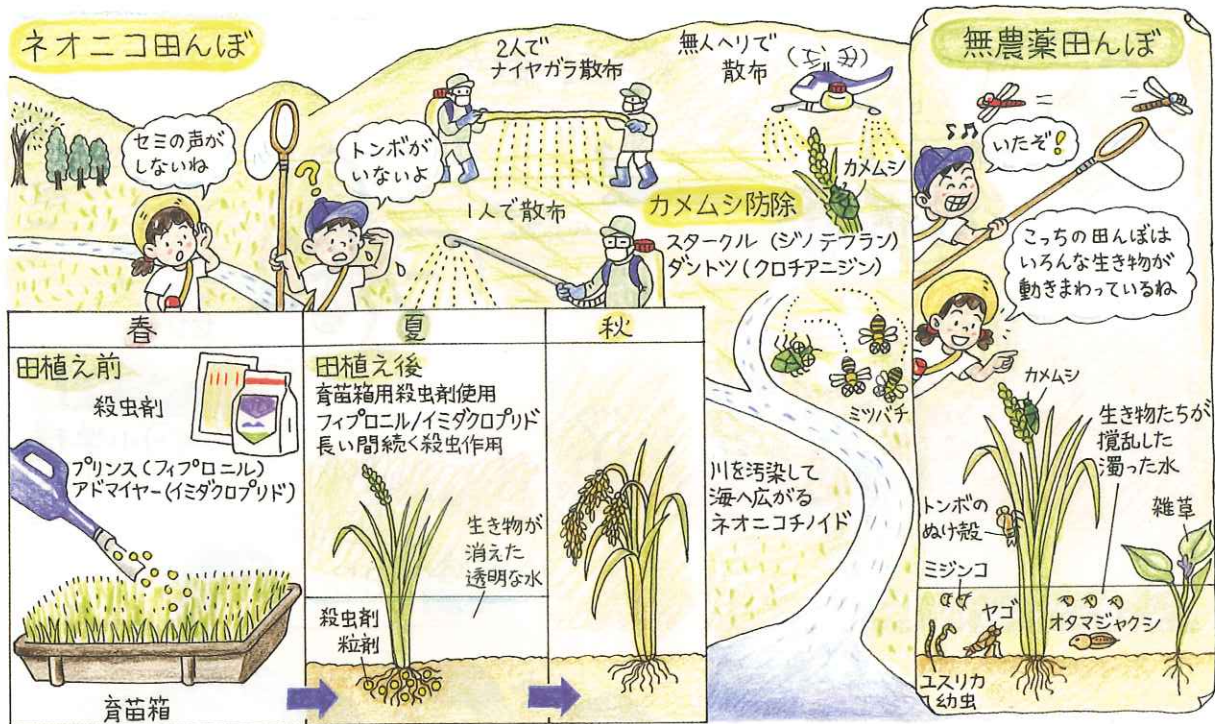


水田で使われるネオニコチノイドー消えるトンボ

稲の育苗箱施用にイミダクロプリドやフィプロニルは危険



イラスト：安富佐織

コメ作りの第一歩は、春、田植え前の苗作りです。病害虫に負けない苗作りが収量や品質を大きく左右します。近年日本の稲作では、機械移植に対応した箱に苗を植える育苗箱が広く普及しています。その際、育苗箱用の殺虫剤としてイミダクロプリド（ネオニコチノイド系）やフィプロニル（ピラゾール系、13ページ参照）の粒剤が多用されています。

これら薬剤は驚くほど効き目があり、それを使用した田んぼでは、イネが青々と成長する夏には水も澄みきり雑草も生えず、全く生き物の気配さえ感じられなくなります。一方、無農薬の田んぼでは雑草が茂り、ミジンコやユスリカの幼虫などの生き物が濁った水の中で動きまわっています。

●ヤゴの死ー消えるトンボ

育苗箱用殺虫剤が全国の水田で2000年頃から

使用され始めました。その頃から国立環境研究所の研究者らは、アキアカネの幼虫（ヤゴ）が大きく減少しただけでなく、水田に生息する水生生物など多くの有用な生物が死滅した原因がイミダクロプリドやフィプロニルにあると育苗箱用殺虫剤の危険性を警告しています。

●カメムシ防除

夏の終わりから秋には、実ったイネの穂につくカメムシを防除するために、ネオニコチノイド系農薬（スタークル：成分ジノテフラン、ダントツ：成分クロチアニジンなど）が無人ヘリコプターやナイアガラ方式などで散布されています。カメムシ防除により米の等級を下げる斑点米の数を減らすのが目的ですが、この時期の散布によって日本各地でミツバチが大量死しています。

森林へもネオニコチノイドの空中散布!

松枯れ農薬空中散布を止めない林野庁、増える子どもの被害



イラスト：安富佐織

松枯れの原因とされるマツノザイセンチュウを媒介するマツノマダラカミキリを殺すという名目で、30年以上にもわたって松林に農薬空中散布が続けられています。しかし松枯れは止まらず、農薬の効果は不明瞭のままです。一方で、松枯れの原因は松枯れ病だけでなく、森林の自然の変遷によるものという指摘もあります。

●増えるネオニコチノイドの散布

林野庁は、2010年から2011年にかけて国有林への有人ヘリコプターによる農薬空中散布の延べ面積をさらに拡大しました。そして散布薬剤は従来の有機リン系薬剤（スミパインなど）よりネオニコチノイド系薬剤（エコワン3フロアブルなど）の使用量が増加しています。

昆虫類すべてに殺虫効果が高いネオニコチノイド散布により、セミの声も聞こえなくなり、さまざまな野鳥が姿を消している可能性が指摘されています。

●子どもたちにも農薬散布の被害

農薬の空中散布が、登校途中の子どもや保育園児にも被害を及ぼしています。農薬をあびた子どもたちには、頭痛や吐き気、目のかゆみを訴えるだけでなく、激しく動き回ったりする異常行動の報告もあります。長野県や島根県などでは、これら農薬の空中散布が、住民や子どもたちの健康被害まで引き起こしているとして、母親たちが立ち上がり、その中止を求めて行動しています。